



筑紫女学園大学リポジット

Transmission between Generations of Play with Baby

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大元, 千種, OHMOTO, Chigusa メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/242

「赤ちゃん」とのあそびの世代間の伝承について

大 元 千 種

Transmission between Generations of Play with Baby

Chigusa OHMOTO

問題意識

様々な側面から乳児の発育にとってのあそびの重要性が研究されている。アタッチメントの形成においても養育者の関わり方としてのあそびの重要性をみることができる (Bowlby, 1969 / 1976)。また、スターン (Stern, 1977 / 1989) によれば、生後 2 ～ 7 ヶ月の乳児が感じることでできる情動スペクトラムのかなりの部分が相互交渉できる他者と共にあることによつてのみ可能であり、乳児の豊かな感情や重要な表象は、必ずしも、食物を与えとか眠りにつかせるといった行為そのものによつてではなく、そのなされ方によつてなされている。「兵庫レポート」(原田, 2006) でも、子どもの手に物を持たせたり、話しかけたりする親の子どものほうがそうでない子どもより発育がよいことも示されている。すなわち子どもと母親とのあそびが子どもの発育によい影響を及ぼすのである。このように乳児にとって他者、とくに養育者とのあそびは身体的、情動的にも非常に大きな意味をもっている。

また、親達は乳児との相互関係のなかで遊び方も工夫していることが明らかにされている。例えば、中西らによれば10か月未満の乳児とのあやしでは母親がリズムの主導権をもっているが、乳児と母親とのあやしの相互関係のなかで次第に子どもに主導権が移行しつつあることや (中西ら, 1988)、父親は身体的遊びが多い一方で、母親のあそびは全体として種類に片寄りが無いが月齢によつては片寄りがあることが明らかになっている。また、運動量の多い遊びは7ヶ月～1歳未満に多く、ことばや歌などは子どもがその意味を理解して反応して遊ぶことができる14ヶ月以上に多いということである (中西, 1992)。Gogate, L.J., Bahrick, L.E., & Watson, J.D. (2000) によれば、乳児に対象物の名前を教える時にことばだけでなく対象物を動かしたり触ったりしながら教えるという“multimodal motherese”が5～8ヶ月の乳児の母親が9～17ヶ月児や21～30ヶ月児の母親よりも多く出現していることや、Masataka, N. (1996・1998) においても、聴覚障害をもつ母親が6ヶ月の聴覚障害児に行う手話がゆっくりとしたテンポでしかも大げさにやっていることや乳児のほうも普段のテンポの手話より好むこと、さらに健常な6ヶ月児もゆっくりと大げさなテンポを好むということが示されている。すなわち人は乳児と実際に関わるなかで乳児の反応に応じて遊び方を変化させ、あそびのバリエーションを豊かにしていくといえる。

しかし現代では少子化、核家族化により乳児と関わることなく母親になる場合が多いと言われる。「大阪レポート」(服部・原田, 1991) および「兵庫レポート」(原田, 2006) によれば、約20年間で乳幼児をまったく知らないまま親になる母親の実態がますます明らかになった。おむつかえなどの世話についてはまさに半数以上がそうであるが、抱いたり遊んだりということすら経験しないまま母親になった者は、1980年時点15.0%であったのが2003年時点では26.9%に増えている。しかしながらたとえ親になるまで子どもとの関わりがなかったとしても親達は日々わが子と関わらざるをえない。乳児と接触経験のない男女の学生であっても実際に乳児と向かい合うと「身体運動的あやし」「接触的あやし」が多くみられ、母親など養育者が子どもに対する独特な「語りかけることば」である“mathereuse”の出現もあったことが示されている(中川, 2006)。たしかに乳児と接触することによってひき出されるあそびはあるが、それ以前に乳児とのあそびを知っていないことにより関わり方への不安は大きい。

乳児との接触経験の少ない状況の母親たちは、どのようにして乳児とのあそびを知るのだろうか。多世代が知っている0歳から2歳の子どもとのあやしあそびを調査した川村ら(1886)は、小学生の回答に多いのが「父母から」「祖父母から」で、大学生も「父母から」「兄弟から」が多く家族間でのあそびの伝承があるとしている。その一方で母・父・祖母・祖父では「いつの間にか覚えた」と記憶が風化しているという。子育て世代の親達がどのようなあそびを知っているか、またそれはどのようにして知ったかについて調べた大元の調査(2005)では、子育て世代の親達が知っている乳児とのあそびでは、身体を使ったり触れ合うあそびや、手遊びやわらべ歌などが多かったが、それらは自分の遊んでもらった経験や身近な人が遊んでいる様子を見て知ったという回答が多かった。この親達は1960年代から1970年代に生まれており、川村ら(1886)の調査対象であった小学1年生、3年生、短大生と同世代にあたるが、20年経っても親たちの記憶が必ずしも「風化している」とはいえない。その一方で自分で考えたり、なんとなくというあそびも見られた。すなわち乳児とのあそびの多くは親や身近な人から伝承されたあそびを原体験的にしているが、乳児と実際遊ぶ事によって、乳児の月年齢によっても自分で考えたりさまざまに変えたり工夫したりして遊ばれている。

この親達世代よりさらに乳児との関わりが少なくなったとされる若い世代は、どのような乳児とのあそびをどのようにして知ったのであろうか。前の世代から伝承されたあそびと、そうではないあそびの特徴は何であらうか。本研究では、年齢的に近い将来母親となる可能性のある女子大生(娘)とその母親それぞれが知っている乳児とのあそびとその伝承経路に注目し世代間伝承されるあそびや遊ばれ方について検討したい。

調査では、回答者にとってわかりやすくするために「乳児」ではなく「赤ちゃん」と記して質問したが、「赤ちゃん」の月年齢の概念が個人によって大きく異なっているので、あそびは「乳児」に限定されるものではなく、回答者が考える「赤ちゃん」とのあそびであることを断っておく。

方 法

調査対象：福岡県内の女子大学生２年生（以下“娘”）34名とその母親（以下“母親”）34名，
計68名

調査期間：2005年７月～８月

調査方法：同一様式の質問紙「赤ちゃんとのあそび」（注１）について無記名による回答

二人の回答用紙を一つの封筒に入れて郵送，または手渡しにて回収

（注１ 2004年「親と乳児との遊びについての実態調査」において使用した質問紙と同じ）

結果と考察

１ 回答者の背景

“娘”の年齢は，19歳から21歳（1986年～1984年生まれ）で，平均19.4歳であった。その“母親”の年齢は，39歳から56歳（1964年～1948年生まれ）で，平均47.9歳であった。両者をあわせた平均年齢は，33.6歳となる。

“娘”の73.5%（25名）が福岡県出身であるが九州（佐賀県３名，熊本県１名，長崎県１名，宮崎県１名）と山口県（１名）では97.5%（33名）である。“母親”の場合も福岡県出身者が61.8%（21名）であるが，九州（佐賀県４名，熊本県１名，長崎県３名，大分県２名，宮崎県２名）では，97.5%（33名）である。子育てに影響を受けるとすれば九州，特に福岡県の土地柄や風土である。さらにその娘の“娘”へも同様の影響をみることができる。

主な養育者については，「母」という回答がいずれの場合も最も多く，“娘”18名（52.9%）も“母親”41名（60.3%）もその母親から影響を受けていることがわかる。特に“母親”のほうがよりその母親から養育されていたと感じている。“娘”に特徴的なのは，主な養育者を保育所と回答したものが４名（11.8%）いたことである。“母親”18名（52.9%）の方が“娘”15名（44.1%）よりも，自分の母親は専業主婦ではなかったと答えている者が多かったが，保育所をあげている“母親”はいなかった。“娘”の回答から，核家族化と外で働く女性が増加し，保育所が普及していったことがわかる。したがって，“娘”が身に付けたあそび文化に家庭の母親や祖父母という近親者だけでなく，保育所の保育士や子どもたちも影響を及ぼしていると推測できる。

“娘”とその“母親”両者ともほとんどが，自分の母親は「忙しそうだった」と回答している。特に“母親”の回答では，「とても忙しい」という回答が22名（64.7%）で「忙しそう」10名（29.4%）を合わせると94.1%である。“娘”のほうは「とても忙しそう」（13名）と「忙しそう」と（13名）で76.4%であった。

その一方で自分の母親が「よく遊んでくれた」という“母親”は12名（35.3%）に対して，“娘”は19名（55.9%）であり，「時々遊んでくれた」では“母親”は11名（32.4%），“娘”は10名（29.4%）であった。その反対に“娘”の１名が「あまり遊んでくれなかった」と回答しているの

に対して、その“母親”は「あまり遊んでくれなかった」が8名、「まったく遊んでくれなかった」が1名いた。「忙しさ」と関係してみると、“母親”の回答の「まったく遊んでくれなかった」1名と「あまり遊んでくれなかった」のうちの6名は「とても忙しそうだった」と回答されていた。

調査対象である“母親”の親たちの多くは戦前、戦中世代にあたる。そしてその子ども、すなわち回答した“母親”たちが乳幼児のころはちょうど高度経済成長にさしかかろうとしていた時期にあたるが、日本全体がさほど豊かではなく、生活することに精一杯の時代であった。主な養育者が母親といえども、子どもと遊ぶ余裕があったとはいえない。むしろ子ども達は異年齢集団でのあそびの中で育った世代である。したがって“母親”たちの身についている乳児とのあそびに関しては必ずしも母親だけの影響ではなく、他からの影響が大きいと言える。それに対して“母親”よりも“娘”の方がより母親との遊びを経験している。「赤ちゃんとよく遊んだ」と回答している“母親”も23名(67.6%)おり、「時々遊んだ」という回答も合わせると30名(89.2%)である。したがって“娘”が知っているあそびには母親からの影響が大きいことが推測できる。

2 「赤ちゃん」の概念とあそびの分類

(1) 「赤ちゃん」の年齢のとらえ方

本調査では、回答者にイメージしやすいように「乳児」でなく「赤ちゃん」と表記した。しかし、本来「乳児」は1歳未満の子どもを指すが、言葉の獲得や歩行の確立、トイレトレーニング等の身辺自立等から、親として1歳以上の子どもであっても「赤ちゃん」として把握している。前回調査(大元, 2004)でも子育て世代の母親が、「赤ちゃん」を0歳11か月から4歳まで(平均約1歳10か月)とかなりの幅で捉えていた。今回の調査では、親の意識として「赤ちゃん」の年齢として、どちらも1歳0ヶ月～4歳0ヶ月までの幅で回答があったが、平均年齢は、“娘”では、1.97歳で“母親”が1.82歳(全体平均、1.90歳)であった。月齢でほぼ1ヵ月の差があるが、両者に有意な差は見られなかった。0歳の「乳児」と4歳の「幼児」とでは必然的にあそびの種類も仕方も異なっており、回答の多くに幼児期にも遊ばれたあそびが入っていることが予測できる。

(2) どのようなときに遊ぶか

“母親”たちは「赤ちゃん」とよく遊んでいるが、いつ、どのような時に遊んでいるのだろうか。“母親”のみ対象に前回調査同様の問いをし、自由記述された文章を「乳児の機嫌や状態」「時間帯」「活動の区切り」の3点から表1-1～表1-3に分類した。一人の回答でも複数に分類されている場合がある。

表1-1 赤ちゃんといつ遊ぶか
(自由記述)...乳児の機嫌・状態

項 目	人 数	割 合
機嫌の良いとき	5	45.5%
機嫌の悪いとき	4	36.4%
赤ちゃんが望んでいるとき	2	18.2%
計	11	100%

表 1 - 2 赤ちゃんといつ遊ぶか
(自由記述)...時間帯

項 目	人 数	割 合
一日中・決まっていない	6	35.3%
午前	3	17.6%
昼間	6	35.3%
午後	2	11.8%
計	17	100%

表 1 - 3 赤ちゃんといつ遊ぶか
(自由記述)...活動の区切り

項 目	人数	割 合	計
のお 都と 合な	家事の合間・時間のある とき・都合のよいとき	11	91.7%
	夕食準備しながら	1	8.3%
子 ど も の 活 動	夜寝る前	1	10%
	授乳後	1	10%
	夕食後	2	20%
	午睡前後	2	20%
	起きているとき	2	20%
	夜起きた時	2	20%
			12 (54.5%)
			10 (45.5%)

前回調査の子育て世代の母親たちと同様に「赤ちゃん」の機嫌の良い時も悪い時も遊んでおり、赤ちゃん」とのあそびがぐずったり泣いたりしたときになだめたりあやしたりする役割を持っていたことがわかる。「赤ちゃんが望んでいるとき」という回答があるように「赤ちゃん」の様子をうかがってあそんでいる母親の姿も見られた。

時間帯では「一日中・決まっていない」が、前は回答数63名のうち5名(7.9%)であったが、今回6名(35・3%)と回答数に対して3割以上であった。また活動の区切りについてもおとなの都合が12名(54.5%)で、しかもその中でも「家事の合間・時間のあるとき・都合のよいとき」が11名(50.0%)と多く、子どもの活動は数が分散されており、どれが多いとはいえない。実際に「家事の合間や家業(農業)の忙しくない時間・時期。赤ちゃんがどんな状態というより大人の都合が優先でした」「子どもが目覚めている時はいつもそばにいて家事の間もベビーシートに乗せ話をしたりしておりました。遊ぶというより話し相手をするのでした」という記述もあった。

それに対して前回のおとなの都合は、41名(53.2%)でほぼ同じ割合であるが、家事の合間は27名(35.1%)で、子どもの活動の「夜寝る前」も16名(20.8%)いた。これらから今回の“母親”は、よりおとなの都合が優先されている面があるが、いつとは意識されないで「赤ちゃん」に関わっていた様子がうかがえる。「赤ちゃん」と「○○あそび」を構えて行うのではなく日常生活の中で話したりあやしたりといったあそびの仕方が行われていたことがわかる。

(3) 知っているあそびの特徴

自由記述による「知っている赤ちゃんとのあそび」を2004年の調査と同様に分類した(表2)。“母親”の回答が177、“娘”の回答が131で全体では308のあそびが記述されていた(表4～表6)。前回の子育て世代の母親の調査では、母親126名で遊び総数が533、一人平均4.2であった。今回一人当たりのあそびの数を平均すると、“母親”が5.5、“娘”が3.9、全体では4.7であった。“母親”と独身の“娘”とでは知っているあそびにおのずと差が出ることは当然であるが、“母親”のほうが子育て世代の母親よりも知っているあそびの数が多かった。

知っているあそびの数は、“母親”と娘である“娘”との間にやや相関がみられた($r = 0.33$)。

表2 個別のあそびの分類

あそびの分類	具体的なあそびの名称、遊び方
かくれあそび	いないいないばあ、ドアに隠れてバア、ハンカチを頭にのせて赤ちゃんが自分で取ったときにバア、かくれんぼ
手遊び・わらべ歌	手（指）を床で動かしてみせる、首を横にして「ねー」とさせる、バイバイなどのジェスチャー、手を開けたり閉じたり、手遊び、げんこつ山のためきさん、一本橋こちょこちょ、おつむてんてん、ラララぞうきん、にぎにぎばー、糸まきまき、グーチョキパー、大きな栗、チョチチョチ遊び、むすんでひらいて、ずいずいずっこばし、グーチョキパーでなに作ろう、じーのめ じーのめ(手のひらを人差し指でこちょこちょする)、赤ちゃんの足をもって「ちょうち ちょうち ちょうち じーなめ じーなめ てんぐり てんぐり パッ」とする
絵本	絵本や紙芝居を読む、絵本を見ながらお話
歌・歌いながら何かをする	NHKの番組の歌を歌ったり歌いながらダンス、歌いながら手遊び、子どもの手足を動かしながら歌う、おんぶして歌いながらゆさぶる、抱っこしたりゆりかごにのせ歌をうたう、ねんねんころりよ おころりよ、音楽を聞かせながら一緒に歌う、歌をうたいあやす
お話	お話を聞かせる、寝る時お話、赤ちゃんの目を見ながら赤ちゃんが発する声に相づちをうって会話、手を握って話しかける
音を出す	ちいさな音量で音楽、携帯電話の着メロを聞かせる、おとなが舌を出し入れしてペロペロや唇をブルブル音を出す、音の出るおもちゃ等であやす、チラシをくしゅくしゅしてその音を楽しませる、抱っこして私の鼻をつまもうとしてきた時に「ビビッ」と音を鳴らす
顔・表情あそび	アイコンタクト、にらめっこ
じゃれあい・子どもの体に触れる	くすぐり、身体全体を触って赤ちゃんとのコミュニケーション、手を握ったりほほに触ったりスキンシップ、赤ちゃんのお腹脇足の裏等を「コチョココチョココ」とくすぐる、ほおずり、抱っこ、入浴時に裸にしたとき赤ちゃんのお腹に口をつけて「ぶー」とする、うつぶせを始めたころ自分も「ゴロゴロ…」と言いながら一緒に転がる、抱っこして背中をトントンたたく
大人の身体を使う運動あそび	高い高い、おんぶして外を散歩、母親の手指をあやしたり語りかけながら赤ちゃんに握らせる、赤ちゃんをひざの上に乘せてギコンパッタン、赤ちゃんを抱っこして歌ったりお散歩する、飛行機、赤ちゃんの脇を持ってぐるぐるまわる、赤ちゃんを背中に乗せて四つんばいで歩く、寝転がって足の裏に乘せて高い高いする、抱っこして左右にゆらす、膝に乘せてゆさぶる、抱っこしてゆさぶる、親のひざの上で子どもがびよんびよんはねる、肩車をしてぐるぐる走り回る、布団のなかでお腹の上にすわらせてゆさぶる、脇にかかえ飛行機、ギコンパッタン、肩車、赤ちゃんを前向きに抱っこして走る、大人の足の上に向かい合わせに立たせ手を握って「イチニサン」と歩く
赤ちゃん体操・体育的運動あそび	日光浴の時に手足等を動かす、ハイハイでおいかけっこ、簡単な振り付けのダンス、体をさする、布の上に乘せてゆりかごのように遊ぶ、赤ちゃんと一緒に体操、よちよち歩きや伝い歩きの頃「おいでおいで」と自分の方に歩かせる、手を握らせて起き上がらせる、足をさすってのびのびさせる
外あそび	庭で花や草を見たりつんだりする、虫をつかまえる、自然の花や虫にふれさせ話をする、砂場で遊ぶ、水遊び、砂場や固定遊具で遊ばせる、散歩、身近な動物に触れたり眺めたりして遊ぶ
おもちゃや物で遊ぶ	ガラガラであやす、人形をくわえたり投げたりする、ボールを転がす、ブロックや積み木で遊ぶ、おもちゃなどの手作り、車のおもちゃに乗り動かす、お手玉、おもちゃを目でおわせる、身近な物を使って、折り紙、滑り台、ティッシュを引っ張り出す、ボールひろい、お絵かき、固定遊具に大人と一緒に乗って楽しむ、牛乳パックに布を貼り階段のようにしたり転がして拾いにいくのを競争、固い紙で作ったジグソーパズル、おもちゃを何回も投げるのを拾って渡す、紙をやぶったりくしゃくしゃにまるめたりする、繰り返しのあそびティッシュの箱から1枚ずつ取り出してあそぶ、なぐり描きをさせる、ひもを通してあそぶ
虚構あそび	人形やぬいぐるみを使って話しかける、ごっこ遊び、ぬいぐるみなどの後ろから話しかけて「バー」と顔をだしてみる、おもちゃでごっこ遊びをする
その他	同じ動作をくりかえす、傍観あそび（人が遊んでいるのを見て遊ぶ）、一人あそび

すなわち“母親”がたくさんのあそびを知っている娘は、やはりたくさんのあそびを知っている傾向にあった。ただし、母親に遊んでもらったかどうかということでは差がみられなかった。

“母親”と“娘”の知っているあそびについて次のような特徴がみられた。あそび全体では、「いないいないばあ」に代表されるような「かくれあそび」と「ガラガラ」などの「玩具や物で遊ぶ（以下、玩具あそび）」がもっとも多く、52（76.5%）あげられていた。次に多かったのが「たかいたかい」などの「大人の身体を使う運動遊び（以下、運動あそび）」で48（70.6%）、「げんこつ山のたぬきさん」などの「手あそび・わらべ歌（以下、手遊び）」が37（54.4%）となっている。

この「かくれあそび」「玩具あそび」「運動あそび」が“母親”も“娘”も知っているあそびとして多くあげられていた。いずれも数値的にあまり差はなかった。この3つに分類されるあそびは、前回の乳幼児をもつ保護者を対象にした調査でも同様に多くあげられていた（大元，2005）。しかし、前回多くみられた「歌・歌いながら何かをする（以下、歌あそび）」52（42.3%）や「赤ちゃん体操・や体育的運動あそび（以下、赤ちゃん体操）」45（35.7%）や「じゃれあい・子どもの身体に触れる（以下、じゃれあい）」あそび44（34.9%）は、今回少なかった。全体でも「歌あそび」25（36.8%）、「赤ちゃん体操」11（16.2%）、「じゃれあい」11（16.2%）である。“母親”のほうは、「歌あそび」19（55.9%）、「赤ちゃん体操」8（23.5%）、「じゃれあい」9（26.5%）と、歌や体を使ったあそびをある程度しているが、“娘”では、「歌あそび」6（17.6%）、「赤ちゃん体操」3（8.8%）、「じゃれあい」2（5.9%）と、わずかしきみられなかった。今回の調査対象である“母親”はわが子の乳幼児期を過ぎての振り返りの回答であるので、現役の親たちとは知っているあそびの傾向が異なっていたが、実際に子育てした中で子どもと歌を歌いながら遊んだ記憶が多かったようである。しかし乳幼児と関わる機会の少ない“娘”では、「歌あそび」、「赤ちゃん体操」、「じゃれあい」はイメージされにくいことがわかる。

一方回答のなかには、「ジーのめ　ジーのめ（手のひらを人差し指でこちょこちょする）」や「赤ちゃんの足をもって『ちょうち　ちょうち　ちょうち　ジーなめ　ジーなめ　てんぐり　てんぐり　パツ』とする」などその人（家族）独自、あるいはその地域で遊ばれているあそび言葉や遊び方のようなものも含まれていた。後者の「ちょうち　ちょうち…」のあそびについては“母親”も“娘”も同じあそびを回答しており、世代から世代への伝承が行われていることがわかった。

3 乳児とのあそびの伝承の経路

あそびをどのようにして知ったかという伝承の経路との関係を表3～表5からみていく。“母親”“娘”とも「身近な人を見て」が非常に多い。「自分が遊んでもらったのを覚えている」という「自分の経験」も次いで多く、さらに「なんとなく」と「自分で考えた」あそびのように自分で創り出すあそびもあげられていた。他にも「テレビ・ビデオで知った」という回答もあったが、“母親”のほうが“娘”よりも多く、当然ながら子ども番組を見るのは、やはり親になってからであることがわかる。「学校で」「妊婦教室で」「子育てサークルで」「友人」「本」から知ったというあそびは少なかった。ここでは、「自分の経験」や「身近な人を見て」知っているあそびと「自分で考

えて」「なんとなく」知っているあそびを取り上げる。

(1) 身近な人からの伝承によるあそび

「身近な人を見て」は「母親」，“娘”ともにもっとも多いが，特に“母親”の回答数の44.9% (74) を占めていた。“母親”の場合，「自分の経験」は20 (11.3%) であったのに対して，“娘”は「身近な人を見て」47 (35.7%) が「自分の経験」45 (34.4%) とほぼ同じ割合になっている。このことについては，自分の母親からよく遊んでもらったという“母親”が“娘”よりも少なかったことから，「自分の経験」よりも「身近な人を見て」を伝承の経路としてあげていると推測できる。反対に“娘”の場合，母親からよく遊んでもらったと記憶している者が多かったことから「自分の経

表3 知っているあそびとその伝承経路 (全体 n = 68, あそび総数 = 308)

数値の上段：実数、下段：あそび分類ごとの伝承経路の割合 (%)

あそびの分類	かくれあそび	らべ歌	手あそび・わらべ歌	絵本	歌・歌いながら何かをする	お話	音を出す	顔・表情あそび	じゃれあい・子どもの身体に障る	使う運動遊び	大人の身体を育ち運動あそび	赤ちゃん体操体的運動あそび	外あそび	玩具や物で遊ぶ	虚構あそび	その他	回答数
回答数	52	37	16	25	7	9	2	11	48	11	25	52	9	4	308		
回答者数68に対する割合（％）	76.5	54.4	23.5	36.8	10.3	13.2	2.9	16.2	70.6	16.2	36.8	76.5	13.2	5.9	68		
あそび総数に対する割合（％）	16.9	12.0	5.2	8.1	2.3	2.9	0.6	3.6	15.6	3.6	8.1	16.9	2.9	1.3	100		
どのようにして知ったか																	
自分の経験	11	6	4	4	1	0	0	1	18	1	7	10	2	0	65		
	21.2	16.2	25	16.0	14.3	0	0	9.09	37.5	9.09	28.0	19.2	22.2	0			
身近な人を見て	34	14	4	8	2	4	0	5	22	4	5	17	1	1	121		
	65.4	37.8	25	32.0	28.6	44.4	0	45.5	45.8	36.4	20.0	32.7	11.1	25.0			
学校で	1	1	3	1	0	0	0	0	1	1	2	2	0	1	13		
	1.9	2.7	18.8	4.0	0	0	0	0	2.08	9.1	8.0	3.9	0	25.0			
妊婦教室	1	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	5		
	1.9	0	0	4.0	14.3	0	0	0	0	18.2	0	0	0	0			
子育てサークル	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	4		
	0	0	0	0	0	0	0	9.09	0	9.1	0	1.9	11.1	0			
友人	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	0	1	7		
	0	5.4	0	0	0	0	0	0	0	9.1	8.0	1.9	0	25.0			
本	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	3		
	0	0	0	4.0	0	0	0	0	0	0	4.0	1.9	0	0			
テレビ・ビデオ	1	5	1	8	0	1	0	0	1	0	0	3	2	0	22		
	1.9	13.5	6.25	32.0	0	11.1	0	0	2.1	0	0	5.8	22.2	0			
自分で考えて	1	0	1	1	3	2	0	2	1	0	2	6	2	1	22		
	1.9	0	6.3	4	42.9	22.2	0	18.2	2.08	0	8.0	11.5	22.2	25.0			
なんとなく	3	4	1	0	0	1	2	1	5	0	3	7	1	0	28		
	5.8	10.8	6.3	0	0	11.1	100	9.1	10.4	0	12.0	13.5	11.1	0			
その他	0	2	2	1	0	1	0	0	0	1	2	4	0	0	13		
	0	5.4	12.5	4.0	0	11.1	0	0	0	9.1	8.0	7.7	0	0			
無回答	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	5		
	0	8.1	0	0	0	0	0	9.09	0	0	4.0	0	0	0			
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100			

験」が「身近な人を見て」とほぼ同じ割合であると考えられる。しかし、3歳までは過去の出来事を想起する際必要な一定の語りのスタイルができていないために、3歳以前の記憶を思い出すということは難しいとされる（海保ら、2006）。彼女らが「赤ちゃん」を0歳から4歳までと捉えていることや、「自分の経験」をあげる場合特に「運動あそび」が多いことから、まったくの乳児期だけでなく少し大きくなってからの体験が記憶されていると言える。

「身近な人を見て」知ったあそびとしては、“母親”、“娘”とも「かくれあそび」が多く、次いで「運動あそび」、「玩具あそび」、「手あそび」の順となっている。これらは「赤ちゃん」と向かい合ったり、表情をみたり、やりとりをするようなあそびである。「赤ちゃん」は生まれてすぐから人の顔を好み反応するが、また他方で「赤ちゃん」のかわいらしさに人はひきつけられる（山口、2003）。

表4 知っているあそびとその伝承経路（母親 n=34，あそび総数=177）

数値の上段：実数、下段：あそび分類ごとの伝承経路の割合（%）

あそびの分類	かくれあそび	手あそび・わらべ歌	絵本	歌・歌いながら何かをする	お話	音を出す	顔・表情あそび	じゃれあい・子どもの身体に障る	大人の身体を使う運動遊び	赤ちゃん体操・体的運動あそび	外あそび	玩具や物で遊ぶ	虚構あそび	その他	回答数
回答数	23	20	8	19	6	7	2	9	22	8	18	27	4	4	177
回答者数34に対する割合 (%)	67.6	58.8	23.5	55.9	17.6	20.6	5.9	26.5	64.7	23.5	52.9	79.4	11.8	11.8	34
あそび総数に対する割合 (%)	13.0	11.3	4.5	10.7	3.4	4.0	1.1	5.1	12.4	4.5	10.2	15.3	2.3	2.3	100
どのようにして知ったか															
自分の経験	5	1	1	1	0	0	0	0	6	0	2	3	1	0	20
	21.7	5.0	12.5	5.3	0	0	0	0	27.3	0	11.1	11.1	25.0	0	
身近な人を見て	15	10	3	6	2	3	0	4	12	4	4	10	0	1	74
	65.2	50	37.5	31.6	33.3	42.9	0	44.4	54.5	50.0	22.2	37.0	0	25.0	
学校で	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	5
	0	0	12.5	5.3	0	0	0	0	0	0	11.1	0	0	25.0	
妊婦教室	1	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	5
	4.4	0	0	5.3	16.7	0	0	0	0	25.0	0	0	0	0	
子育てサークル	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	4
	0	0	0	0	0	0	0	11.1	0	12.5	0	3.7	25.0	0	
友人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	4
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11.1	3.7	0	25.0	
本	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	3
	0	0	0	5.3	0	0	0	0	0	0	5.56	3.7	0	0	
テレビ・ビデオ	0	3	0	7	0	1	0	0	0	0	0	2	2	0	15
	0	15	0	36.8	0	14.3	0	0	0	0	0	7.41	50.0	0	
自分で考えて	1	0	1	1	3	2	0	2	0	0	2	5	0	1	18
	4.4	0	12.5	5.3	50.0	28.6	0	22.2	0	0	11.1	18.5	0	25.0	
なんとなく	1	1	1	0	0	0	2	1	4	0	2	3	0	0	15
	4.4	5.0	12.5	0	0	0	100	11.1	18.2	0	11.1	11.1	0	0	
その他	0	2	1	1	0	1	0	0	0	1	2	1	0	0	9
	0	10.0	12.5	5.3	0	14.3	0	0	0	12.5	11.1	3.7	0	0	
無回答	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	5
	0	15.0	0	0	0	0	0	11.1	0	0	5.56	0	0	0	
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	

山口によれば、赤ちゃんは1歳前後の子どもが一番かわらしいと評価をうけているが、この時期は子どもも自立的な活動を始め身体も表情もしっかりしてくる。子どもとの向かい合うあそびを行う事で一層「赤ちゃん」に引き付けられ、遊びが促されるのである。

今回調査数が少なかったためにあそびの差が見られなかったが、やはり乳児とのあそびは「身近な人」を通じて伝承されている。なかでも、先にあげた「ちょうち ちょうち ...」については、“母親”と“娘”とも「身近な人を見て知った」ということから、かならずしも自分の母親からでないとしても、ごく近い距離で乳児と人々とのあそびから学習していることがわかる。

表5 知っているあそびとその伝承経路（娘 n = 34, あそび総数 = 131）

数値の上段：実数、下段：あそび分類ごとの伝承経路の割合（％）

あそびの分類	かくれあそび	手あそび・わらべ歌	絵本	歌・歌いながら何かをする	お話	音を出す	顔・表情あそび	じゃれあい子どもに身体に障る	大人の身体を使う運動遊び	赤ちゃん体操・育的運動あそび	外あそび	玩具や物で遊ぶ	虚構あそび	その他	回答数
回答数	29	17	8	6	1	2	0	2	26	3	7	25	5	0	131
回答者数34に対する割合 (%)	85.3	50.0	23.5	17.6	2.9	5.9	—	5.9	76.5	8.8	20.5	73.5	14.7	—	34
あそび総数に対する割合 (%)	22.1	13.0	6.1	4.6	0.8	1.5	—	1.5	19.8	2.3	5.3	19.1	3.8	—	100
どのようにして知ったか															
自分の経験	6	5	3	3	1	0	0	1	12	1	5	7	1	0	45
	20.7	29.4	37.5	50	100	0	0	50.0	46.2	33.3	71.4	28.0	20.0	0	
身近な人を見て	19	4	1	2	0	1	0	1	10	0	1	7	1	0	47
	65.5	23.5	12.5	33.3	0	50.0	0	50.0	38.5	0	14.3	28.0	20.0	0	
学校で	1	1	2	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	8
	3.5	5.9	25.0	0	0	0	0	0	3.9	33.3	0	8.0	0	0	
妊婦教室	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
子育てサークル	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
友人	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
	0	11.8	0	0	0	0	0	0	0	33.3	0	0	0	0	
本	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
テレビ・ビデオ	1	2	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	7
	3.5	11.8	12.5	16.7	0	0	0	0	3.9	0	0	4.0	0	0	
自分で考えて	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	0	4
	0	0	0	0	0	0	0	0	3.9	0	0	4.0	40.0	0	
なんとなく	2	3	0	0	0	1	0	0	1	0	1	4	1	0	13
	6.9	17.6	0	0	0	50.0	0	0	3.9	0	14.3	16.0	20.0	0	
その他	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	4
	0	0	12.5	0	0	0	0	0	0	0	0	12.0	0	0	
無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	100	100	100	100	100	100	0	100	100	100	100	100	100	0	

(2) 自分で考えたり創り出したりするあそび

あそびは伝承だけでなく、新たに創り出していく場合もある。「なんとなく」や「自分で考えて」というあそびをみると、「母親」の場合回答数177のうち「自分で考えて」が18、「なんとなく」が15で合わせて33であった。そのうち「玩具あそび」27のうち8(29.6%)や「運動あそび」22のうち4(18.2%)や「外あそび」18のうち4(22.2%)があげられている。実際に乳児とかかわるなかで乳児の反応のよかったあそびをいつのまにか遊んでいたのであろう。しかし、「娘」においては「玩具あそび」は131のうち25(73.5%)「運動あそび」26(76.5%)あげられているが、大半は「自分の経験」と「身近な人」で、「自分で」や「なんとなく」はあまりみられない。

これらのあそびは実際に「遊んだ」というあそびでなく「知っている」ものであるので、「母親」は自分の経験に基づいて具体的イメージが持っている可能性があるが、「娘」の場合は実際に子どもと関わったことがないことが多く、イメージできないのであろう。

まとめと課題

世代間で伝達されるあそびとしては、まずは、「身近な人の遊んでいる様子を見て」という回答が「母親」と「娘」とともに多く、あそびの種類として「かくれあそび」、「運動あそび」、「玩具あそび」、「手あそび」など向かい合いや身体を使って赤ちゃんの表情を確認しながら遊ぶあそびが多いことがわかった。特に「母親」の場合、「身近な人」からの学習が多いので、実際自分が遊んでももらわなくても周囲の人々や状況から見聞きすることが遊びを身につけることに影響するといえる。

知っている「赤ちゃん」とのあそびについて「母親」よりも「娘」のほうが「自分の遊んでもらった経験」からと回答しているものが多かった。「娘」は「母親」に比べると記憶が風化していないからともいえるが、「娘」も母親から遊んでもらったという回答が多く「母親」自身も赤ちゃんとはよく遊んだと回答しているものが多かったことから、単純に「娘」の記憶が新しいとだけとは言えず、意識的に遊んだ「母親」からの影響も大きいと考えられる。しかし今回それを明らかにすることはできなかった。

あらたに創り出されたあそびは「娘」よりも「母親」に多くみられた。「母親」の場合「玩具あそび」や「運動あそび」や「外あそび」があげられている。実際に乳児とのあそびは、かかわるなかで乳児の反応の良かったあそびをいつのまにか遊んでいたというあそびでもあるので、「母親」のほうが多いことも理解できる。

何歳までの子どもという年齢を限定せず「赤ちゃん」との知っているあそびについて、回答者のイメージで回答してもらったため、乳児期に限らず幼児期のあそびまで回答されていた。このことは一方で概念上の厳密さに欠ける調査ではあったが、他方で「赤ちゃん」とのあそびが乳児期に限定されず、子どもが大きくなっても遊ばれる性質のものであると言える。そもそもあそびは、遊び仲間や状況によってルールややり方を変えながら遊ぶことができるからあそびなのである。したがって同じ名称のあそびでも、遊ぶ子どもの年齢によって変化させながら年齢を超えて遊ばれるのは、

あそびのもつ特質とも言える。

今回は「知っているあそび」についての質問紙による調査であったが、実際に「赤ちゃん」と関わることで行われるあそびが多い（中川ら，2006）。また“母親”の多くが「一日中」と回答するように生活や家事の合間での「赤ちゃん」との関わりが、あそびを捉える上で重要になっている。今日、子育て支援では、母親とその子どもを対象にしたあそびの講座も実施されているが、家庭での「赤ちゃん」とのあそびとはどのように行われていくことが親と子どもにとって自然で適切なのであろうか。今後実際の日常生活の中で、どのように「赤ちゃん」と関わるのかということについて、具体的に検討を行っていく必要がある。

参 考 文 献

- ボウルビー，J. 黒田実郎・大羽薫・岡田洋子・黒田聖一（訳）（1976）. 母子関係の理論 愛着行動 岩崎学術出版社
- (Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss* .Vol.1. *Attachment*. New york : The Hogarth Press)
- Gogate, L. J., Bahrick, L.E., & Watson, J. D. 2000 A Study of multimodal motherese : The role temporal synchrony between verbals and gestures. *Child Development*, 71, 878 894.
- 原田正文 (1993). 育児不安を超えて 思春期に花ひらく子育て 朱鷺書房
- 原田正文 (2006). 子育ての美貌と次世代育成支援 ― 兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会
- 服部祥子・原田正文 (1991). 乳幼児の心身発達と環境：大阪レポートと精神医学的視点 名古屋大学出版会
- 海保博之・楠見孝 (2006). 心理学総合事典 朝倉書店
- 川村晴子・井上利恵・平井タカネ (1986). 家庭におけるあやし遊びの内容と構造 大阪女子短期大学紀要 第11号 43 60
- 川村晴子・中西利恵・増原喜代・内山明子 (1997). 子どもの育ちと遊び 朱鷺書房
- Masataka, N. (1996). Perception of Motherese in a Signed Language by 6 Month Old Deaf Infants. *Developmental Psychology*, Vol.32 No.5, 874 879.
- Masataka, N. (1998). Perception of Motherese in Japanese Sign Language by 6 Month Old Hearing Infants. *Developmental Psychology*, Vol.34 No. 2 241 246.
- 中川愛・松村京子 (2006). 乳児との接触未経験学生のあやし行動：音声・行動分析的研究 発達心理学研究 第17巻 第2号 138 147.
- 中西利恵・川村晴子 (1988). あやし遊びのリズムについて 大阪女子短期大学紀要 第13号 73 80.
- 中西利恵 (1992). 家庭における母親および父親と子どもの遊びについて(2) ― 0歳から2歳までの乳幼児のあやし遊びのスタイルに関する検討 ― 湊川女子短期大学紀要 第25集 57 67.
- 大元千種 (2004). 保育学生の幼児期における遊び体験に関する考察 筑紫女学園大学紀要 第16号 249 268.
- 大元千種 (2005). 親と乳児との遊びについての実態調査 筑紫女学園大学紀要 第17号 265 284.
- スターン，D.N. (1989). 乳幼児の対人世界―理論編（小此木啓吾他，訳）岩崎学術出版 (Stern, D.N. 1985 *The interpersonal world of the infant*. New York: Basic Books, Inc.)
- 山口真美 (2003). 赤ちゃんは顔をよむ 紀伊国屋書店